

[原 著]

公衆衛生看護としての家庭訪問実習の展開方法

小川 三重子 北山 三津子 山岸 春江 平山 朝子

Practice Program of the Home Visit's in Public Health Nurse's Activities

Mieko OGAWA, Mituko KITAYAMA,
Harue YAMAGISHI, Asako HIRAYAMA,

要旨: 公衆衛生看護活動としての家庭訪問の実習方法を、学生の体験の現状確認と実習直後の反応の整理により検討した。

本講座では、家庭訪問実習は単独訪問後に保健婦の家庭訪問に同行して個別指導を受ける方式で実施しており、今回次のような成果が確認できた。即ち、訪問技術面での総合的な学習と、地区活動手段としての家庭訪問の位置づけ・意義の理解ができてきていることである。

これらは、実習過程で臨床指導者が実習地の保健婦と目的を共有してそれぞれの立場で指導を行ったこと、また、実習展開方法の特色として、単独訪問時の体験が訪問に対する関心を高め、同行時の視点を明確かつ具体化したため、学習の動機付けを促していることによるものである。

家庭訪問を素材にして、地域をベースにした予防活動を含む看護活動のあり方を教育できることが確認できた。

Key word: Public health nurse
Home Visits
Practice
Program

1 目 的

1990年の保健婦教育カリキュラム改正の適用によって、公衆衛生看護領域の実習は180時間から135時間になった。この限られた時間内に、講義で展開した公衆衛生看護の理念や原則を学生が追体験し、実感として理解するためには、家庭訪問・保健事業などの実習プログラムにおいて、単にその場面における技術面の学習に留めず、常にそれらの公衆衛生看護における位置付けや意義に結び付けて考えさせることが必要となる¹⁾。そのためには、実習地の保健婦と目的を共有した指導の工夫や学生の学習動機付けを高めるような工夫が必要である。

既存の研究では、主に実習プログラムの組み方を中心とした実習の全体を通しての教育方法とその成果に関する報告²⁾³⁾や、例えば家庭訪問実習について家庭訪問の場での援助という視点で教育成果を報告したもの⁴⁾⁵⁾や、地区把握のための実習展開方法に関するものはある。しかし、一つの実習プログラムを素材に、公衆衛生看護の効果的な教育方法を研究したものは見あたらない。そもそも保健婦活動は、家庭訪問、健康教育、健康相談等の活動が孤立しているものではなく、各々はその活動手段であって、個々の活動を統合して成り立つものである。このことを教育の場で伝えることは重要であり、そのことによって一層実践的な教育にすることができると思われる。

本学における公衆衛生看護領域の学習は、2年次の後期より3年次後期までは講義を中心に進め、4年次に3/8単位の实習を行っている。その

千葉大学看護学部地域看護学講座
Department of Community Health Nursing,
School of Nursing, Chiba University

中で必須項目としている家庭訪問実習では、在宅看護技術の学習は、基礎看護、成人・老人、小児等の他の講座で実施しているので、本講座は、保健指導を主目的とし、さらに予防活動につなげていく公衆衛生看護としての家庭訪問に焦点をあてて行っている。

家庭訪問は、対象者本人への個別援助ではなく家族員を含めた世帯を対象とした援助であり、地区全体に責任を持つということの出発点となる活動である。と同時に、援助時に他の保健サービスを導入したり訪問活動で把握したニーズから新しく保健サービスを作っていく等の点で地区活動の基本となるものである⁶⁾。そこで、学生教育においても保健婦の行う地区活動での家庭訪問の位置付けや意義、他の保健事業との関連が理解できるように意図して行っている。

実習の展開方法は、最初に母子・成人老人の各一例ずつの単家庭訪問を行い、次に保健婦の家庭訪問に同行して個別指導を受ける方式で実施している。これは、訪問の方法を保健婦の模倣で身につけるのではなく、先ず自分で試みることによって、訪問に対する学生の関心を高めさせ、単独訪問時に苦勞したりできなかった体験が同行訪問時の学習の視点を具体化し、学習への動機付けを促すことを狙っている。

また、実習地では、保健婦に地区担当者の立場で指導に加わってもらうことにより、地区活動としての理解を促すことを意図している。

本研究では、この仮定に基づいて行われた本実習方式を通して、実際に学生に対してどのような成果を挙げているかを確認する。

2 方 法

- 1) 実習体験の現状確認：1987～89年の3か年度分の四年次学生240名分の訪問実習を、単独・同行訪問別、訪問対象種別に区分し、件数を示す。
- 2) 実習直後の学生の反応調べ：1989年度分80名について集計する。(1)単独訪問直後に5名1組で個別事例毎に臨地指導(教官及び地区担当保健婦)を行い、その最終段階で行った全体カンファレンスでの学生の意見を個別にまとめ、実習目的に沿っ

て整理する。(2)保健所保健婦との同行訪問終了後に学生が学んだこととして記したものを実習目的に沿って整理する。(3)(1)と(2)を対比させながら、意図した実習効果を挙げているかを確認する。

3) 実習の方法

①家庭訪問実習の目的

表3のa～kに示した項目を重視している。

②家庭訪問実習の方法

a. 単家庭訪問

<対象者選定> 訪問の前の週に、臨床指導教官が保健婦と共に事例を選定し、電話予約をしておく。これは、限られた時間内で確実に体験できるようにするためと、学生にとっては初めての家庭訪問なので、対象事例の受け入れを考慮するためもある。

<学生への意識付け> 地区活動の一手段であることへの理解を促すため、地区担当保健婦に代わって行くこと、継続援助者への訪問では地区担当保健婦の継続訪問の中の1回を訪問するのであることを認識させるようにしている。また、例えば、乳児の4カ月児相談未来所者への訪問では未来所理由の把握、リハビリ教室来所者への訪問では参加しての感想を本人から直接捉えてくることを学生の課題とし、そこからその地域における4カ月児相談やリハビリ教室のあり方を考えさせる等、地区の保健活動全体を考えさせるように工夫している。

<訪問計画作成> 訪問理由及び対象事例の簡単な情報を基に、本人の健康問題への援助と家族員の健康生活への援助の二つの柱を確認し、健康問題・日常生活等について基本的な援助計画を立てさせている。その後、訪問記録を見て計画を具体化させ、さらに、担当保健婦から事例の話聞かせる。同時にその場で保健婦には学生の援助計画を担当保健婦の立場で確認してもらっている。

<ケースカンファレンス> 訪問後、学生5名1グループで保健婦と臨床指導教官が入って、個々の対象者についてカンファレンスを行う。学生が援助目的、実施した援助内容、今後の援助計画を報告し、地区担当保健婦に確認してもらい、さらに今後の実施計画についての話し合いをする。

<記録> 記録票には家族についての健康状態や援助内容・計画の欄も設け、本人と家族の二つの面からの保健指導の柱を見失わないようにしている。さらに、家族単位による問題解決能力を高めるのに有効な援助を問う欄を設け生活の場での具体的な援助を考える機会が必須となるように工夫している。

b. 同行訪問

翌週に行う同行訪問では、ともすると見学実習に終わりがちなので次のような工夫を行っている。担当保健婦から、事前に記録を見せてもらうと同時に事例の把握経路や諸保健事業とのつながり、対象者の置かれている状況等を説明してもらい、それに基づいて学生自身も計画を持って参加するようにさせている。また、訪問後は、必ず担当保健婦とのカンファレンスを行い、実施した援助の意図や、今後の援助方針などを話し合う場を設けている。

3 結 果

1) 実習体験の現状

①単独訪問： 対象選定の方針は、保健事業との関連を理解させるために、諸事業から訪問が必要となった事例をとりあげた、その結果、対象は表1のとおりとなった。

表1 単独での対象種別訪問件数
(1987～1989年度 学生240名分)

母子	239	成人・老人	243
* 4カ月児相談未来所	101	寝たきり老人	149
* 出生後状況未把握	53	公害患者	22
低体重児	29	リハ教室参加者	19
4カ月児相談後	28	高血圧	12
1歳6カ月児健診後	6	基本健診後	10
離乳食教室後	4	糖尿病	8
産婦	1	住民検診後	6
その他	17	福祉からの依頼	2
		その他	15

注 *印は初回訪問事例である

母子事例では、4カ月児相談未来所の乳児訪問が中心となったが、学習成果としては、4～8カ月児の発達段階の確認技術や離乳食指導などを実践できたことと、4カ月児相談の目的と未来所群追跡の意義を考えさせ、そこから家庭訪問という方法の利点を実地に考えさせることができたことが挙げられる。成人老人事例では、家族介護や世帯単位の保健指導を学ぶのに好都合な寝たきり老人への訪問が多くなった。これに加えて公害認定患者やリハビリ教室来所者への訪問をする学生もあり、グループとしては、他機関・他職種との連携の実際を学び、その意義と必要性を考えることができた。

②同行訪問： 対象の種別は、表2のとおりである。学生1名当たり1.5事例訪問している。この学習では、保健所の各事業の中で、どのような事例が訪問対象になるのかや、事業の成り立ちや関連法規等についても同時に理解させ、その中での訪問活動の果たす役割をつかませようとした。

表2 同行での対象種別訪問件数
(1987～1989年度 学生240名)

母子	172	成人・老人	191
低体重児	102	結核	57
3歳児健診後	23	難病	56
養育医療	12	精神障害	47
新生児	7	寝たきり老人	17
小児慢性特定疾患	6	基本健診後	7
心身障害児	4	痴呆性老人	2
妊婦	2	独居老人	2
障害児	2	糖尿病	2
その他	16	その他	1

2) 実習直後の学生の反応： 学生が表現したものを実習目的に沿って整理すると表3に示す通りであり、延べ件数は単独訪問後70件、同行訪問後139件であった。それらは、訪問技術と援助方法に関するものと大別できる。学生の表現の中から、主なものを例示しながら以下にまとめる。

(1) 訪問技術及び援助方法に関する学び

①単独訪問後の反応

表3 実習目的別にみた学生の反応（件数）

実習目的	単独訪問	同行訪問
a. 明確な根拠に基づいた訪問計画の立て方	7	2
b. 家庭に向いて看護活動を行う場合の目的の伝え方	0	1
c. 家庭の場で観察できる情報の特質	8	26
d. 人間関係確立の方法	2	12
e. 面接時の対応方法	10	25
f. 援助姿勢及び援助の具体性	5	11
g. 個々の家庭の生活や条件に合わせた援助方法	14	8
h. 次回の援助計画を示すことのできる記録方法	0	1
i. 保健・医療・福祉サービスの活用を図る援助方法	4	14
j. 訪問活動を通して得られた情報に基づく地区把握	4	7
k. 家族を単位としたニーズの把握と援助	10	26
l. その他*	6	6

* 単独訪問では、対象者の生活歴を大切にされた援助や生活習慣を改善することの難しさを実感した、時間をかけた援助や知識の必要性を実感した、学生が良く受け入れられた体験から担当保健婦のそれまでの活動の積み重ねを感じた等である。

同行訪問では、保健婦が把握している他の同病者の工夫や情報・豊富な経験や知識を活用した援助がわかった、保健所保健婦の訪問対象がわかった等である。

学生が体験して実感できたこと、困難であったこと、疑問等が表現された。

<家庭の場で観察できる情報の特質> 家庭生活や個別性を把握できる、生活は見ることによってよく把握できる、相手がリラックスしていて本音がきけた等がある。援助の基本である対象者の生活の理解、ヘルスニーズの把握について学んでいる。一方で、疑問としては、生活を具体的に把握できるのは訪問指導の利点だが、プライバシーを考えたときどこまで介入してよいかわからないというものもあった。

<家庭の生活や条件に合わせた援助方法> 本人の生活にあった助言が必要である、清拭の方法もその家庭にあるものを使いその人のやり方を尊重する、家庭の事情を含んだ指導ができる、家庭では病院と違い患者が主体性を持ちその人の生活が中心である、病院内看護に比べ多方面からの援助がある、具体的育児指導・家庭でできる方法の指導が大切、対象者の個別性に対応し生活を考慮した援助ができるとよい等が挙げられた。また、こ

のことにに関して困難だったこととしては、生活に入って援助していくこと、対象にあった指導の実施等があった。

<対応方法や援助姿勢及び援助の具体性> 困難であったことの表現が多く、その内容は、自然な会話から情報を把握、話の中から援助すべきことを捉える、把握していた問題には落ち着いて対応できたがわからないことは自分も不安になった、健康な人へのさらに健康になるための援助等であった。

②同行訪問を加えてからの反応

学生の表現件数を見てもわかるように、訪問の各場面で多くの学びを得ている。その内容は、単独訪問時に比べて具体的で実践的なものが多い。

<家庭の場で観察できる情報の特質> 単独時の内容に加えて、本人の症状だけでなく日常生活や活動範囲の現状にまで及ぶ情報を得ることができる、話の流れの中で本人の生活をとらえることができる、本人不在でも庭の様子や部屋の様子を見て生活環境を知ることができる、必要な情報をすばやくキャッチし判断することの大切さを実感し

た、難病患者の訪問を通して本人の身体面・精神面・社会面のニーズを総合的にみていく視点を学んだ、本人と家族両方から情報を確かめることが大切である、予約をしないで日常生活のありのままを把握することも大切で訪問予約した方がよい場合・しない方がよい場合がある等があった。

＜家庭生活に合わせた援助＞ 日常生活に基づいたもの程受け入れてくれる、その家庭で出来そうなことを具体的に実演してやる気を促す、生活に即した形で具体的に伝えて相手が実行しやすいようにする等であった。

また、対応方法は、単独では困難であると表現した学生が多かったが保健婦から援助姿勢を学んでいるものが多く、以下のような反応が得られた。＜対応方法＞ 打ち解けた雰囲気でも話も安心して話を聴くだけでも安心感を与えて精神的な援助になる、計測を正確にして質問には毅然とした態度で答えることの大切さを実感した、相手が話しやすい雰囲気をつくり自然に聞く中で必要な情報を得ることの大切さを知った、相手の苦労をいたわり努力を認めることが重要である、相手の反応を見ながら無理なく話を聞き出し問題点に関連づけていく話し合いを学んだ、相手の訴えに共感し理解を示す態度は大切であることがわかった、指導しようと思いつかないでエプロンをつけたり児の身体測定をしたりしてから相談に入っていけばよいことがわかった、その場ですぐ指導した方がよいことと時間をかけて解決すべきことの見分けの大切さを知った、相手の反応を捉え無理強いしない、等である。

＜援助姿勢＞ 保健婦が前に出るのではなく本人や家族自身で積極的に解決できるようにする、専門的根拠を示しながら分かりやすく説明し助言すると相手に一層安心感を与える、指導内容は必ず相手ができることの範囲にとどめてやる気を出させる、少しの進歩でもそれを必ず認め励ますことで相手の意欲を高めたり出来るまで待ったりする、対象がその時点で一番困っていたり心配したりしていることをまず援助する、最終的に問題に取り組むのは本人とその家族である、おしつけるような援助をするのではなく解決過程を助ける立場である、離乳食の指導などは食品例を挙げ母親が実

行しやすくする、等の大切さを指摘しており、対応方法についても援助技術についても保健婦を細かく観察していることがわかる。

(2) 家庭訪問実習を通しての地区活動の理解

家庭訪問実習後の学生の反応の中で、地区資源との結び付きを考えたり、世帯単位の援助、地区把握等、地区活動に発展させた学びも多く表現されている。表3では、i・j・kに整理した。

①地区資源の活用： 単独訪問では、準備段階で予防接種や健（検）診、或いはその他の保健事業について時期・場所・申し込み方法など当該地区での実施状況を確認させたので、訪問場面で必要者に具体的に紹介することができている。一方、福祉制度や地区内医療機関については事前の情報収集が不十分であったので援助場面での活用はあまりできていない。その事については、カンファレンスの場で地区担当保健婦から指導を受け、地区資源を幅広く把握し活用する必要性を学んでいる。

これに対し同行訪問の段階では、医療機関との連携が、まず対象者の状態をよく把握し、的確な受療を促すために必須であることや、対象者のニーズ及び置かれている状況に即して資源を活用するには関係職種との連絡調整も必要であることを実感している。また、公費負担制度の詳しい説明をすることも大切、主治医にも情報提供していく必要性を感じた等、保健所保健婦として、保健所が窓口になっている公的制度の紹介や、医療機関に情報提供し地域医療の整備を図ったりする役割があることも学んでいる。

②訪問活動をとおして得られた情報に基づく地区把握： 単独訪問では、訪問の交通手段を徒歩・自転車・公共交通機関に限っているため地区と保健センターの位置関係を実感を持って理解すると同時に、往復の道中で地区の様子を見てきている。訪問だけが手段ではないが、歩くことにより住民生活を理解し、さらには、地区保健事業もそれらの情報を生かして企画することが大切であることを学んでいる。

また、母子の訪問では対象者の隣家の人も乳児を連れてきていた例があり、訪問に行くことにより

センター内にいたのではわからない地域的なニーズを把握できることを実感している。

同行訪問では、本人を通して家族の健康状態、さらには地区の人々の様子・ニーズ・民間で行っているサービスも含めた地区資源も把握できること、及びそれらを意図的に行うことの大切さを学んでいる。また、近所づきあいの現状などを掴むことにより援助協力者を見つけ出す方法もあることがわかったというものもある。

これらを通して、地区の様子を観察することは、ニーズを明らかにするという意味だけでなく、援助内容を豊かにするためにも不可欠であることを知ったという。

③家族を単位とした援助：講義では世帯を単位とし、家族員についても各々を援助の対象とすることを伝えているが、その必要性については実習を通して理解を深めている。単独訪問では対象者本人の健康問題が家族にも大きな影響を与えていることや、生活の場の援助では家族員全体を対象とし問題解決を図ることが必須であることを実感している。同行訪問後ではこれらの学びを表現する学生が数として増え、さらに、本人への援助のためには家族の協力が不可欠でそのための家族への働きかけが必要、家族が自立できるような援助が必要、対象を家族・地域へと拡大していく視野が必要等、世帯単位の援助が公衆衛生看護として基本であることとの理解につながる学びが得られている。

4 考 察

1) 訪問技術における総合的学びの促進

同行訪問後は、家庭での観察や情報収集の方法、人間関係づくりなどの対応方法、援助の具体性、家族単位の援助など経験豊富な保健婦から幅広く具体的に学んでいることがわかる。これは、最初に単独訪問を試みたことによって、計画の段階も含めて学生が主体的に臨んだことで可能となったものと思われる。

単独訪問では、学生が気付かずに援助しなかった面は、訪問直後に現地保健婦から指摘を受けている。これが同行時には生きてきて、訪問援助の

あり方を確実に捉えるようになり、特に先輩保健婦の援助技術を深く学ぶこととなっている。また、困難だったことや疑問に感じたことについても同様であり、同行時には対象者の反応も併せて捉えながら保健婦の援助技術を観察し学びを得ているものと考えられる。このことから、まず、学生自身が対象者に責任を持ち、援助を試みる場を作ることが大切であると言える。

2) 地区活動の手段としての家庭訪問

単に看護技術を提供する方法としてのみではなく、公衆衛生看護活動の手段としての方法でもあることを伝えることは必須であり、そのためには実習プログラム構成を様々に工夫する必要がある。

例えば、単独訪問で、学生が褥創処置を試みようとして準備したのに対し、事前指導で担当保健婦から、対象者と主治医の関係や地区担当の立場で医師会との関係を考慮することの大切さを指摘され助言を受けた。日々地区で活動している保健婦の指導を受けることにより、学生は、訪問活動が保健婦と対象者との個の関わりのみではなく、地区の条件の中で行われていることを改めて認識できたものと思われる。

また、単独訪問後のカンファレンスを地区担当保健婦を中心に進めた結果、その場面での援助方法だけでなく、他の保健事業を活用したり、民生委員や推進員との連携をとるなど地区の中でどのように援助して行くかについて、実際の地区情報を提示しながらの助言を受けることができた。そのことは、保健・医療・福祉サービスを活用した援助方法の学習に加えて、把握したニーズから保健事業やそれらのサービスを見直したり、新しく活動を作っていく等、訪問活動を地区全体の活動に反映させる方法の学習にもつながっていると見える。結果に示した通り、地区活動の理解を表現した学生の反応は、同行訪問後に多くみられた。これは、そのような学習過程を経ることにより、同行訪問時の保健所保健婦による公的制度の紹介や医療機関との連携と言った援助場面を見たときに、単に対象者にとっての効果的な援助ということのみでなく地区活動という面でも重要であることに自ら気付きを得ているためと考えられ

る。

一方、家族単位の援助という基本事項についてみると、単独訪問では、その場では家族の情報把握や援助までは至らないことも多く、カンファレンスで保健婦から問われたり助言を受けたりしてその必要性を認識すると同時に、実際にはどの様に行うのかといった疑問や困難さを実感して終わっている。しかし、その体験があることにより同行時には、保健婦が母子訪問で兄弟の発達状況を確認したり、介護者やその他の家族員一人一人の健康の様子をごく自然に把握している様子を見て、それが意図的に世帯単位の援助として行われていることに気付いている。

3) データ収集における限界について

本研究では、単独訪問後と同行訪問後の学生の反応に関するデータ収集方法が異なっているため、二つのデータを個人別に照合したり、対等に比べて比較することはできない。そうなった理由は、本研究のデータ収集のために実習本来の姿を変更することはできないためである。とりわけ、単独訪問後にレポートとして自己評価や反省を書かせると、不十分さや不完全さを記述することが多い。この段階では、内省的状況をつくるよりも、むしろ、教員も加わったグループディスカッションによって、訪問活動そのものの意義・果たす役割を広く気付かせ、同行時の視点を豊富にすることを狙った方が実習を効果的にすることができる。これらについては、教育を第一として実施する実習の中で行った研究であるのでそこには限界があると考えられる。しかし、同行後個人別調査では、単独時に振り返っての学びを問いかけているので、そのデータからは本実習方式の効果を検討できると考える。また、学生の学びの内容を検討すると、同行後の学習成果は、技術面に代表されるような訪問経験が増えたことによるものだけではなく、意図的な教育的働きかけによるものも多くなっている。

4) 今後の課題： 最初に単独訪問実習を行うには、指導者が準備段階や事後において意図を持って細かな指導をすることが必要となる。事実、最初の計画は、必ずしも事例の個別性に対応しきれ

ておらず、情報収集の方法や援助内容も実践的ではない。また、カンファレンス報告や記録においても、その事例にとって重要なことが整理されていない傾向が伺えた。これらに対しては、準備段階で教官側から学生に事例に応じた問いかけを行えば、さらに考えさせることが可能であろう。即ち、最初に立てる訪問計画は事例についての情報が少ないため、情報収集計画に近いものになるのだが、その後記録を読んだり、保健婦の話の聞いたりして計画を具体的にしていっていった時に学生が訪問のポイントをどこに置いているか、情報収集にしても、その事例ではどの項目に重点を置き何を見てこようとしているかを確認し、指導することが必要と思われる。

また、1回1回の訪問が受持ち地区の人口集団の健康を守るためにどのような意義を持つかを実習期間内に意識的に考えさせることは公衆衛生看護教育において重要である。この面では、同行時に学習したことを有効に活用したならば、一層効果的な教育とすることが可能と思われる。本年度はこの点で、同行訪問実習での豊富な学習素材を十分活用し尽くしたとはいえない。今後、さらに強化した教育的働きかけを考えていく必要がある。

引用文献

- 1) 平山朝子： 実習指導の考え方と方法—臨地実習指導者と教員のために—、保健婦学生実習マニュアル、第一版、60-66、日本看護協会出版会、1990
- 2) 小中綾子、飯塚正子、斉藤茂子、今若陽子： 島根県における保健婦教育、保健婦雑誌、Vol. 45 No. 3、241-248、1983
- 3) 小野桂子、長尾長男： 保健所における保健婦学生実習教育、保健婦雑誌、Vol. 39 No. 4、297-305、1983
- 4) 東久子、吉田ひろみ、山本フミ代： 保健所実習における学生の訪問事例レポートより、保健婦雑誌、Vol. 40 No. 8、704-707、1984
- 5) 鈴木隆子： 家庭看護技術における教育、保健婦雑誌、Vol. 42 No. 9、795-804、1986
- 6) 平山朝子： 家庭訪問の方法、公衆衛生看護学総論 2、第一版、51-67、日本看護協会出版会、1990

SUMMARY

This study is an investigation of the program of the home visit's practice in public health nurse's activities. We confirmed the experience of the student and sorted out the reaction just after the practice.

The practice was performed as follows. First the student experienced home visits alone. And then they did along with public health nurses of the health center and were guided individually by them. Consequently following results confirmed.

- 1) They learned many techniques concerning the home visit of public health nurses.
- 2) They learned the meaning of the home visits in public health nurse's activities.

We think that these results are related to the following. As each process, after we and public health nurses obtained the purpose of the practice we corrected students from both sides. And students became more interesting in a home visit and they made view points about the home visit of public health nurses by experience of the first home visit. And thus they motivated students to learn.

We confirmed that by this practice of home visits students learned a principle of public health nurse's activities for improving the health of the entire community.